

子供の繪 (其三)

菅原 教造

(八) 心境の繪の誕生

前の「人言自然」言ふ項目で、人間さは何ぞや言ふ事を、いろいろの言ひ現はし方で申して見ました。今度は、この同じ問題を、別な言ひ方でお話して見ませう。先きに、「向う側」言ふ「此方側」を一まきめにして、天來の斷案さも素の心さも言つた事を、一つこゝで言ひ直して見ませう。非常に簡単に言ひ直せば、それは向き言ふ事です。更にこの向き言ふ事を、一層人間らしく言ひ換へれば、向けられてあるこゝなるでせう。天來の斷案さは向き言ふ事です、素の心さは向けられてあるこゝです。

人間言ふものは、人の氣持言ふものは、絶えず休みなく走つてゐるものです、絶えず磨かれてゐる氣合ひです。この鋭い氣合ひを一言で言つて見れば、あてに向つてゐるこゝ、即ち向き言ふ事になります。向き——言ふのは、所謂知情意を一つかみにしたその心棒言つてもいゝでせうし、又知情意なきを突つ放したピン張り切つた心境、ツーッ通り貫いたたゞ一本の筋である言つてもいゝでせう。強いて意識の方の言葉を使ふとすれば、思惟の閃きであり、叡智の輝きです。

知情意を一つかみにするこゝか、知情意を突つ放すこゝか言ふのは、その根本の特徴を言ひたいからです。人間言ふものの本性を話したいからです。昔から、今でもさうですが、人の心を説く場合に、必ず、本能さか理性さか、思惟さか直觀さ

か、知情意ださか言ふやうに、きまり切つて、何でも差異・區別・分類を土臺にして説く悪い癖があります。その方が學問的ださでも考へてゐるのでせう。さう言ふ専門家に對して、「一體、學問が大切なのか、さういふ學問が研究の目あてにしてゐる人間の方が大事なのか」、質問したくなります。差異點を證議してゐるさ、人の心が切れ／＼になつて見えます。そんなことをするよりも、共通點、根本の筋を掴む事を考へたらゝでせうに……。感情さか情操さかは「氣持の調子、匂ひ、味」さ言ふ事で、これは向きの見本のやうなものです。たさへば、豫感さはモヤ／＼した向きです、好きや嫌ひや感激はハッキリした向きです。靈感インスピレーションさは的申した向きであり、回心カンヴァーシヨンさは向きの更生であり、美感さは向きになり切るさです。又意志さか欲求さかは「ものにする氣持」さ言ふ事で、ものに向つてビューッさ飛んで行く矢のやうなものですから、意欲は向きそのものです。世間で本能々々さよく言ひますけれども、本能の脱皮したものが叡智・理性なんで、人はその叡智を握りしめてゐるんです。それを、その叡智にわざわざ變な皮を被せて、本能の何のさ言つて驕いでゐるんです。叡智は「向きの向き」であり、眞實ほんじつでない何物をも何事をも赦さない裁きです。一點のくもりのない玲瓏透徹した利刃です。純粹そのものです。

このやうに、代表的に思惟さも叡智さも言はれる向きは、心さ言ふものゝ意識さ言ふものゝ本性です。それは、磨かれて光り、脱ぎ捨て脱ぎ捨てゝ走る心境です。謂はゞ疾走そのものであり、神速そのものであるために、向きは純の純なものさなるのです。「あゝこれだ」さも「なるほど」さも思ふ暇のないほどの、ものささが形を取つて現はれる前の、つまりまだ言葉の出来ない、言葉が固まらない、言葉にましまらない前の心境です。言葉もまだ出て來ないさ言ふよりも、實はしがみついて來ようさする言葉を、「まださ、そんなさでは駄目じやないか」さ言つて、振り捨てゝ走つてゐるさ言つてゝ位、それ位鋭い凄氣持の閃きなんです。一言で言へばさ速度そのものです。

今假りに、時間ミが歴史ミが言ふものを抜きにして、人ミ人ミが——この「人」ミは、人の中の人ミ言ふ事です——對してゐるミします。二人の向きが一つに合すれば、二人がキッミ睨み合つたゞけで、あらゆる人類の生活史も文化も、たゞ一點に凝集されてしまつて、それであらゆるものミが解決され盡すでせう。前に述べたやうに、十二卷のフィルムを一遍に見た事になるでせう。いつでも人間の世界が、實にごたく／＼してゐるのは、この凄いい閃き、この叡智が見えるか見えないうがになつて、あミはカスで取りまかれてゐるからなのです。文化はカスですから、いつまでたつても、カスは進みやうがないわけなんです。

この向きミ向きミの交渉は、謂はゞ真劍勝負の鏖戦り合ひです。戦ひの終りの一瞬です。こゝまで來れば、もう理窟も技も何の役にも立ちません。最後の氣合ひ一つで勝負がきまります。純粹、エッセンス、叡智、極意、向き——これが人間そのものです。この一つが即ち全部なのです。

人類生活のあらゆる型、たミへば、環境、民族、時代、傳統、地位、職業、性格、氣質、その他まだいろいろあるでせうが、さういふ長いものに卷かれ、重いものに引ずられたら、この向き・この速度がどうなるのか。それに卷かれたり引ずられたりしないで、却つてさう言ふものを磨くのが向きの向きたる本分なのです。これが即ち個性です。個性は不動智です。ジーツミしてゐるやうで、實は千變萬化してゐる動きなのです。個性は決して性格や氣質なごゝ言ふやうな型の一種ではありません。絶えずあらゆる型を破りつくす鋭い氣合ひ……ミ言ふよりも、絶えず自分で自分の作り出した型を破る所に、個性の本性があるのです。自分で自分を殺して、その殺した一瞬に生きるのが個性です。

心境の繪の誕生を説く前置きが、大變長くなりました。この氣持の動き・走り・閃き——それは意識の元締たる叡智又は思惟・即ち、「ものミが形を取つて現はれる前の向き」であり、これがものミの主人公です。この思惟・この主人公に對

して、この向きを現はす「これ／＼かう／＼」と言ふ言葉、この向きを現はす「こんな形」言ふやうな思ひ浮べた心境の繪即ち心像、さか、この向きを現はす眼で見る知覺物即ち畫面、さか言ふやうなものは、一括して言へば直觀、即ち、「もの」が形を取つて現はれたもの」であり、これは、主人公の後に於いて行くお供であり、家來です。（註——こゝで言ふ直觀は廣義のもので、知覺心像を包括したものです。狹義では知覺だけを直觀と言ひます。人によつては、「直接に眞理を把握する事」を直觀と言つて居りますけれども、こゝではそれを直覺と名け、直觀と區別して置きます）。

家來は主人公あつての家來であるやうに、直觀は思惟あつての直觀です。直觀だけではものにならないのです。自立が出来ないからです。たゞ思ひ浮べた姿（心像としての直觀）があつたにしろ、それが何であるかを意味づける思惟が閃めかなかつたら、心盲がものを見てゐるやうなものでせう。

勿論これと反對に、思惟だけ睿智だけがあつて直觀がなければ、それは、たゞば虚無を貫く一道の殺氣のやうなものです。これを擱む言ふことは、何十年の人間の壽命をたつた一瞬で済ましてしまふ言ふことです。その餘りにももの凄氣合ひに撃たれて、大抵の人は氣絶してしまふでせう。それはまた、たゞばカスを抜きにした人類の生活史と言ふ事です。文化と言ふカスがあつて人類の生活史が成り立つのですから、さう言ふ境地は、たゞ一瞬の生活焦點となつて燃える言ふことになるでせう。例の十二卷のフィルムです。

このやうに、直觀は思惟あつての直觀ですから、（五）の「子供の世界と大人の世界」といふ項で述べたやうに、心境の繪が浮き上る言ふのは、決して單なる直觀、單なる心像だけでは無いのです。この直觀を主宰しこの心像を意味づける藝術的思惟が閃めく言ふことが中心點になるのです。それですから、心境の繪は、思惟を中軸とし心像を胴として廻る獨樂のやうなもので、思惟と心像との一如一體の構成なのです。随つて閃きが變れば姿が動きます、姿が變るのは閃きが動

くからなんです。

さうしたら、ビツタリまさあた的に中つた心境の繪が生れるか、比喩的の言ひ方になりますが、次にその徑路を述べて見ませう。

思惟は走ります。走るから思惟なのです。走る言ふのは、磨かれ磨かれながら、カスを脱ぎ捨て脱ぎ捨てる事を、比喩的に言ひ現はしたものです。心境の繪がまこまる言ふ事は、思惟が心像を統一する言ふ事です。そのまこまつた途端には、思惟は餘りに鋭いものですから、もうその心像がカスになつてしまふのです。それですから、思惟は折角まこまつたものを、すぐ捨て、次の階段に進まなければなりません。つまり走る言ふのは「まだくものにならないよ」言ふ氣持なのです。思惟の率ゐる心像の群れが、まだ篩ひ落しが足りなく、或は大切なものを見落したりして、十分に統一されてゐない言ふことです。そこで吐られ通しの心像は、齒がみをしながら、「これでもか、これでもか」言つて、思惟のあみを追ひかけます。その思惟が、「もういゝ時分だな」思つて、ビタリ立ち留まれば、それはハツ氣合ひの懸つた所謂捨て身の一喝の瞬間です。追ひついた心像は、バタ／＼思惟を取り圍んで展開し整列します。これが思惟直觀の融合統一の境地です。この一瞬が心境の繪の誕生の刹那です。しかもこの第一の誕生と共に、すぐまた思惟は走ります。一旦自分でまこめた心像の直觀組織が氣に入らないものですから、それを捨てゝ走るのです。走るから思惟なのです。捨てられた心境の繪は、バラ／＼になつて解體してしまひ、第二の誕生のために、すぐまた思惟のあみを追ひかけます。

「このやうに走つてばかりゐては、果てしがないではないか。一體、我々は何時になつたら落付けるのか」、實にさうです。人間の味は、實にこの果てしない道を走り續けてゐる所にあるのだ言つていゝでせう、これが「個性の無限性」であり、こゝに「人間の永遠の若さ」があるのです。もこ／＼向きは鋭い・凄い・澄み切つた、醒め切つた氣持ですから、その追求には切りがない筈なんです。それですから、心境の繪は、出來てはほぐれ、まこまつては崩れるものにきまつてゐる

のです。しかし、こゝにたゞ一つ、「煮え詰つた點」を言ふ事が考へられます。これは、何遍も何遍も、やり直しやり直ししてゐるうちに、我にもあらずフツツ行きついた宿りです。自分では決して出来たなきと思つてゐないのですけれども、氣がついて見るミ、それが何時の間にか出来上つてゐるのです。自分ではさうやらかうやらたぎり着いた夜の宿なんです。が、實は行く處まで行き着いた双六の上りになつてゐるのです。それは謂はゞカン所で、行き足りなくもなく、又行き過ぎもしないピッタリした急所です。二度ミ再びそんなものが手に入らない事もありませうし、うまくその呼吸がわかれればあミがズツミ樂になる事もあるでせう。それから先きは銘々の心の持ち方一つです。

向う側の立場で言へばカン所、此方側の立場で言へばカンです、實は同じものなんです。苦行をして成心を捨ててゐるミ、その途端にカン所を捕まへる——捕まへたその刹那の氣持がカンです。「あの人はカンがいゝ」を言ふことを聴きますが、世の中に年中カンのいゝ人と言ふものはありません。ものにぶつかつた瞬間の正しい把握が、カンがいゝと言ふ事なんです。平常は樂に寝てゐていゝんですが、その代り醒めた時には凄く醒め方をするわけなんです。

ものごミがまごまる機會ミ申しますか、そのカン所と言ひますが、その究極點、つまり心境の繪の誕生のモーメント、これを更に別の比喩で話して見ませう。先きに出した例で言へば、心境の繪の誕生の瞬間は、廻つてゐる獨樂を見てゐるやうなもので、何處までが心棒で何處までが胴であるか、全く區別がつかないやうに、思惟ミ直觀ミが一如一體のものになつた刹那です。前に叡智は正味であり文化はカスであると言つたやうに、思惟は正味であり直觀はカスであるミすれば、心境の繪の誕生は、カスが正味になり切つた實にすばらしい瞬間なのです。又思惟は身體であり直觀は衣裳であるミすれば、心境の繪の誕生は、名人の舞ひを見てゐる時のやうに、衣裳が身體ミ一緒になつて生きてゐる刹那なのです。そこには抜けてゐるものもなく、締つてゐるものもなく、過ぎた所もなく、足りない所もなく、たゞフツツあるべきものがある

だけなのです。いや、あるべきものがあるなごと思ふ間隙もないほどのものなんです。

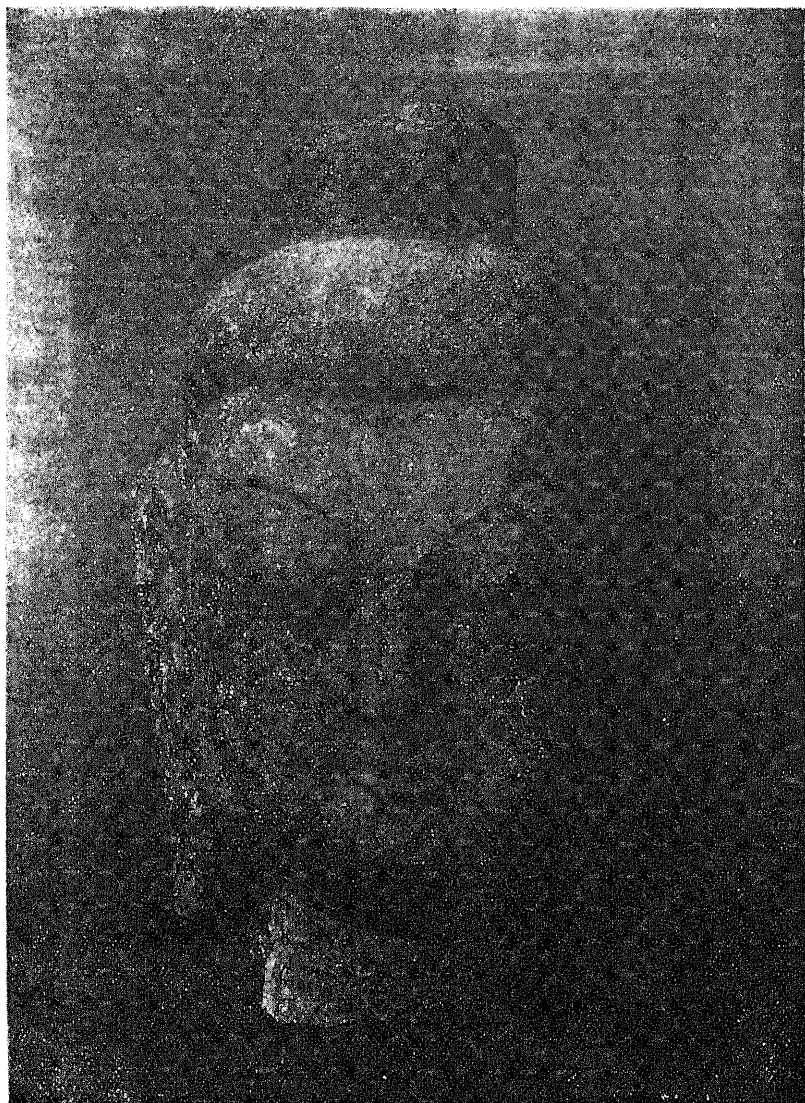
苦勞してゐるうちに、いろいろの心境の繪が浮び上つて來るでせうけれども、急所に嵌つた心境の繪は、たつた一つだけです。たつた一つがピカリミ光り、トンミ強く響くのです。そして、この心境の繪の中の心境の繪が一つだけ、すぐ畫面の繪になるのです。

叡智の凄さ・鋭さを、一瞬、肉づけした作品を、お目にかけませうか。こゝに掲げた支那の六朝佛がそれです。かういふ冷かに、捨て切つた、肅然としたものは、日本の天平佛なごのフツクリ人を迎へてくれる慈愛の相さは、根本的に違ふ所があります。それは醒めてゐる者ミ、眠つてゐる者ミの差です。又突つ放して考へさせる者ミ、抱きかゝへて甘へさせる者ミの差です。道、道理、向き、叡智、さういふ純の純なものは、(七)の「人ミ自然」の終りで述べたやうに、もこ／＼人間離れのしたものです。それを無理に人間的の形にしようとするのですから、つまり不可能を可能にすることなのです。

それですから、この佛像を見て、どんなモデルを使つたかと言ふやうな事を、初めに考へてはいけません。もこ／＼人間的のものが土臺になつてゐるのではないのです。又この眉や眼や鼻や口や頬や頤なごを一々眺めてから、さう言ふものを合せて、佛像の氣持を考へたりしてはいけません。部分が先きにあるのでも、形が先きにあるのでもないのです。先づ人間を離脱した刹那の鋭い叡智があり、ただ向きがあり、閃く氣配があり、凄い氣持があるミ考へるのです。それに感應して寄つて來たいろ／＼な姿を、捨てゝゐる拍子に、フツミ心境の彫像がましまつたのを、石に刻んだのが、この佛像だミ考へた方がいゝでせう。かう言ふ考へ方が、子供の繪を見る土臺になるのです。

又この佛像は、さう言ふ動きさういふ向きを、他人に知らせるために作つたのだミ考へる事も、當つてゐないミ思ひます。それよりも、千五百年も前の北魏の土人が、道のために、湧いて來たさういふ氣持を自證するのに都合のいゝ機會を

支那六朝時代の佛像



與へられたから、さういふ都合のいゝ生活瞬間に、それがうまくまゝまつたのだと考へる方がいゝでせう。他人がこの作品をさう解釋するかなと云ふ事は、恐らくはあまり考へてゐなかつたでせう。かういふ考へ方も、やはり子供の繪を見る土臺になるのです。

この彫刻を見てゐるに、一體かういふ佛様は、教へを説くのかさうか、と言ふ事が考へられて來るでせう。この佛様も實は教へを説くのです。

やはり教へは教へなんですが、それは突つ放して考へさせる教へです。道の道、正味の正味、たゞ、閃き、燃える焦點を投げつけて、跡を見ずに、ツイそのまゝ立ち去つてしまふのです。「本筋の事だけはハッキリ言つた、この通りにしなければ滅びるのだぞ。滅びなければ滅びるがいゝ」。と言ふ意味を残して、何も言はずに往つてしまふのです。説く事は説くんですが、この説き方は、手を盡して解らせて人を救ふなと云ふ甘い説き方ではありません。「解るかも知れない、又解らないかも知れない。解つてもいゝし、又解らなくつてもいゝ。解る者には解るのだが、そんな人には説く必要がない。又解らない者には聴かせたつて仕様ががない」。と言ふ風に説くのです。説くと言ひますけれども、實はそこに集つてゐる人達だけのために説いてゐるのではありません。そこにゐる見物は、ゐないと同様なんですから、謂はゞ見物のない芝居をしてゐるやうなものです。そして結局、ほんさうの見物は自分一人だと言ふ事が解つたものですから、皆を捨てゝ往つてしまふのです。繪をかいてゐる小さい子供の氣持が、假りに大人に呼びかけるとしたら、かういふものじやないでせうか。

(九) 心境の繪と畫面の繪の間

思惟は走り走り走つて、直觀を構成したり破却したりして、心境の繪を練ります。人間の氣持・人間の思惟が向きである

と言ふのは、その向ふ目あてが、「道」であり、「道理」であり、「ほんもの」であると言ふ事です。「ほんもののもの」に向ふ所の向きであると言ふ事です。それですから、この氣持は單なる知でなく、行ぎやうであり、信念です。一心に絶えずぶつかつてゐるうちに、ものごとの本筋の道が掴めるのです。此様にして、練りに練つた心境の繪がまじまつた瞬間に、ピタリミそれがすぐ畫面の繪になります。大人の場合では、此二つのものゝ中間には、何物もないのです。畫面の構成に年月をかけて、非常な苦心をする所謂力作・大作は別として、小品即ち即興的作品は、かういふ氣合ひから生れるのです。

子供の繪は皆小品です。小品ですけれども、大人の小品と違つて、小さい子供の繪——次に述べる第一・第二・第三の場合、大人の所謂畫面の繪ではありません、大人本位に考へるミ、その前階段です。所謂、未定稿・試作・習作、或は下書き・草稿で、いつも進行の途中にあつて、畫面は最終の仕上げになつてゐないのです。このやうに小さい子供の場合では、大人で言ふ進行中の心境の繪が、しかも子供特有の心境の繪が、そのまゝ畫面の繪になつてゐるのです。それですから、子供の畫面の繪は、子供の心境の繪なしには決して考へられないのです。

大人で言ふ畫面の繪と心境の繪との間に動く所のまだ文化のカスを知らない初心の構成、思惟を中心とする童心的な直觀構成、これがそのまゝ畫面の繪になつた場合が、右に述べた前階段です。子供の立場としては、それで立派な畫面の繪であるし、繪の方の大家には、それがよく解るのです。しかし一般の大人は、これを正當な畫面の繪と考へる頭がないものですから、こゝで假りにさういふ大人本位の名をつけて、前階段として置くのです。これが「心境の繪と畫面の繪の間」
と言ふ事です。文化のカスを背負ひ込んだ大人には解らないんですけれども、これが小さい子供のものゝ掴み方であり、子供の持つてゐる世界の現はれであり、子供の創り出す繪の世界の誕生なのです。

この前階段の第一は、思惟即ち向きの世界だけが、生き／＼活躍して畫面の繪を構成する場合です。これは科學者が、



分子ミが構成式ミか言ふやうな模型を使はずに、純粹な原理を考へる氣持ミ似てゐる面白い境地です。小さい子供は、夢中になつて、鉛筆をグル／＼グル／＼走らせまゝ。大人から見て唐草模様の無限の連續ミ思はれるやうなものが、大膽に紙面一ぱいに勢ひよく暴れ廻ります。いや、紙の外の机の上にも鉛筆が走ります。「これは、なーに」ミ訊いて見るミ、「雨こんこん」ミ答へます。雨降りの氣持なんです。子供も雨も一つになつて畫面に跳び廻つてゐるのです。これを、全く繪の解らない西洋の兒童心理學者の眞似をして、引き搔き廻はしミ言ふやうな意味の搔き畫ミか錯畫ミか濫塗なミ、失禮な呼び方をせずに、本筋に従つて、「向きの繪」ミ名づけたらいゝミ思ひます。大人の世界で、この向きの繪の調子で描いたものミして誰でも知つてゐるのは、カンデンスキーの繪です。こゝに插繪ミして掲げたのは、「コンボジション第五」ミ言ふ作品です。

小さい子供の持つてゐる世界は、大人ミ違つて、個々

の事物の形さか、全體の場面の統一さか言ふやうな直觀組織が、まだ畫面にましまりません。子供の生活には、直觀よりも先きに思惟だけが動くもの、淒い所があります。そして、かういふものゝ掴み方、この純粹な思惟の閃き、向きだけの認識、子供はこれをすぐ畫面に移さうとするのです。謂はゞ、ただ氣を以て描く言ふ心境なのです。個物的直觀や關係的直觀と言ふやうな仲介者なしに、いきなり思惟が畫面に飛び出すのです。それですから、畫面はたゞ思惟の走りとなり、連續した線となつて描現されるのです。子供の世界の全體の局面が向きの線となり、個々の物も、物と物との關係も、この線の中に含まれて描現されます。それですから、變な橢圓形がお父さんであつたり、一本の線が汽車であつたりします。この向きの繪は、向きとしての走りとしての認識の世界であるさにも、同時にそれが、「天來の圖案」であり、「素の裝飾」でもあるのです。これは謂はゞ「繪の素」であり、繪の出發點であり、源泉です。向きの繪は、見る通り、線の連續ですが、假りに前後がかすれたり切れたりして、一本の線だけが紙面に現はれたらしたら、それは専門の大家を驚かすやうなすばらしい味の線なのです。アダムの手によつて描かれたやうな、文化のカスにまみれない純粹な作品です。「アダムの線」です。

前に(七)の「人さ自然」といふ項の自然についての第三の考へ方さいふ所で、「技巧」の問題を説いて、踊りさ工藝品さ繪さを較べた事がありました。向きの繪は、向き即ち「氣持の素」が、體の動き手の動きさなつて、そのまゝ畫面になつたものです。それですから、向きの繪は踊りの譜のやうなものです。今から二十年も前の事です。西川流の踊りの家元西川己之造から聽いた話があります。九代目團十郎が勸進帳の辨慶で延年の舞ひを舞ふ時、己之造は番卒さして舞臺を勤めました。團十郎と言ふ人は、二十五日間の興行に、やまの置き所を毎日變へるのて有名でした。この延年の舞ひも、やはり毎日少しづゝ違ふので、己之造は半紙に化粧用の紅を擦り込み、その下に白紙を敷いて、それを番卒の袴の下に入れ、その上から爪で筋をつけながら、師匠の舞ひの足さりを追つて行つて見ました。舞臺が濟んでからソツとその紙を取り出して

見るに、踊りの譜が赤い線となつて白紙の方に現はれます。今日の炭酸紙のやり方です。それを毎日取つて較べて見るに、何處をさう違へて舞ふのか、ハッキリ解つたさうです。踊りの方の人になるに、足ぎりの譜を見たゞけで、辨慶の姿も動きも、ありあり出て來ます。大人はこの立場から子供の「向きの繪」を見て、考へ直さなければならぬのです。

第一の場合がすめば、次の話はすつと樂になります。第二は、思惟が畫面の繪と心境の繪とを結びつけて統一してゐる場合です。つまり、向きの狙ふ直観組織は、畫面の繪と心境の繪とが綜合された二重組織になつてゐるのです。このやうに、向きは絶えず心境の繪で畫面の繪を變化してゐるのですから、畫面を本位にして考へるに、これは思惟が心境の繪によつて畫面の繪を補足してゐるものと見て、この第二の場合を、「補ひの繪」と名づけていゝでせう。

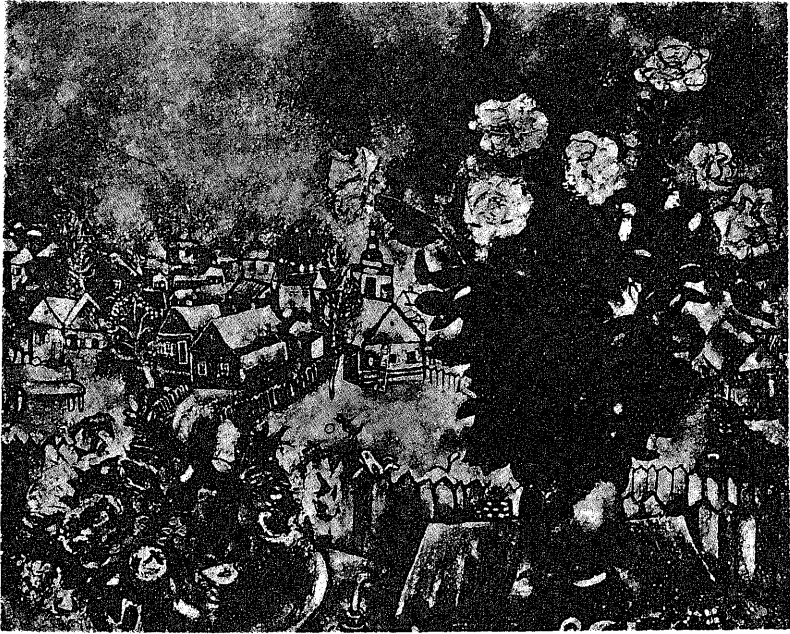
次に、之を織物の比喻で申して見ませう。織物は經絲たていとと緯絲よこいととで織り出されるのですが、「補ひの繪」の場合では、經絲が畫面の繪となり、緯絲が心境の繪となります。畫面としては、向ふに經絲が張られてあるだけで、他には何も見えて居りません。緯絲は此方で心境の繪として、解けたり結んだりして動いてゐるのです。思惟は此二つを統制して、其時々に、色々の織物を織り出してゐるのです。それですから、經絲しか見えない大人には、全く此織物の見當が付きません。

西洋では、シェークスピア時代の舞臺面は、背景を描く代りに、札を何々の森とか何々の河とか字を書いて立てたさうです。そして役者にその景色を精しく美文的に物語らせました。見物はその臺詞せりふを聴いて、背景を自分で描き出してゐるのです。つまり舞臺面は一種の補ひの繪になつてゐるわけです。この節は、芝居の舞臺裝置が巧妙になりましたけれども、この國にはまだ、能樂といふ古典的な面白いものが繁昌して居ります。この點から考へても、又、茶の湯とか、南畫や俳畫などが悦ばれる所から考へても、日本人は、「補ひの繪」については、世界中で一番よくそのコツがわかつてゐる國民なんです。それが子供の補ひの繪のわからないと思ひます。

子供の「補ひの繪」は、實に天馬空を行くすばらしいものです。畫面の繪は、もろゝ織物の經緯よりもつゝ自由なものである上に、更に心境の繪で變化されるものですから、この畫面の構成は、どんな事でも出来ない事はないと言つていいのです。つまり、初めつから大人の考へた繪の法則を認めてゐないのです。普通、畫面と言ふは、大人は固定した平面を考へます。しかし補ひの繪の畫面は、劇の舞臺や映畫の場面のやうなものです。この畫面は、奥行きもあり、移動もします。大ざつばに描かれたものは、立體的に活動し、彫刻のやうな重さを持つたり——随つて畫面につゝかひ棒を描き添えたりするのみならず、色も勝手に浮んだり消えたりします。

第三は、思惟が走つて行くにつれて、つぎ／＼に浮んで來る場面、さういふ／＼の直觀組織を、一遍に畫面の繪にする場合です。此様に、移り變つて行く心境の繪を、一緒にまゝめて畫面の繪に組み立てるのですから、これを「組み合せの繪」と名けていゝと思ひます。もろゝ／＼かういふ移動的直觀組織の畫面は、從來の繪の法則から言へば、型破りなのです。この繪は、思惟が個々の直觀を合成するのです。それですから最も本筋の所を言へば、「向きの繪」に直觀の肉をつけ心像の衣裳を着せたのが、この「組み合せの繪」であると言ふ事になるでせう。前に話したやうに、子供の生活では、心境の繪と畫面の繪との間に、大人ほどの差がありません。又心境の繪が何時までもハッキリしてゐますから、現在と過去との差が、大人のやうにひゞくありません。さて、さういふ多くの心境の繪の中から、さの二つを選んで畫面の繪にしようかと思へる前に、子供はそれを皆畫面の繪にして見ようと思へるでせう。しかし皆言つても畫面に制限がありますし、又組み合せる方法にもいろ／＼の仕方があります。

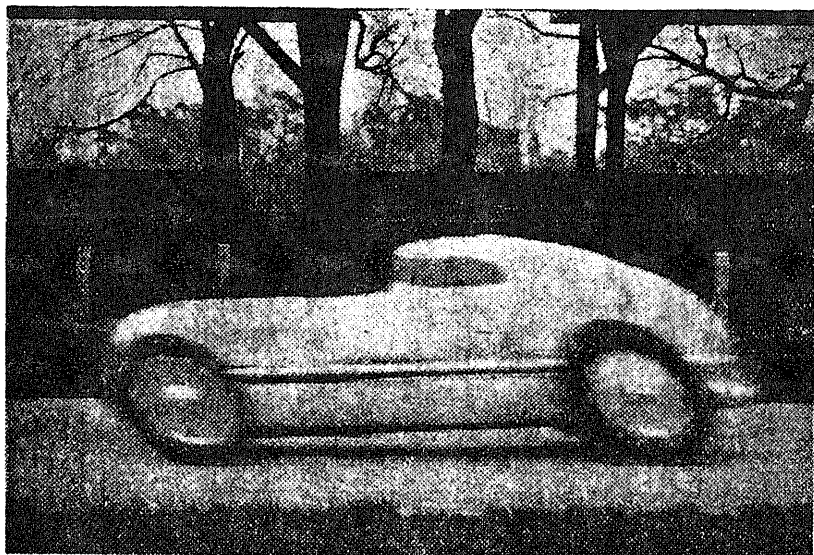
大人の世界のかういふ組み合せの繪としては、歐洲戦争のあたり、イタリーに起つた未來派の畫風は、その草分けでせう。こゝに掲げたシャガールの「花と風景」といふ繪も、この中に入るでせう。この繪を見るに、眼に見えてゐる室内の花



の實景ミ、想ひ出ミして浮んだ風景の心像ミが、一緒に畫面に描かれてあります。文學の方ミしては、岩波文庫に譯されてゐるビリニャークの小説「北極の記録」なミも面白い例でせう。又前に(二)の「繪の大道は一筋道」ミいふ項で出した挿繪ミしては、「鋼鐵のクライマックス」ミ言ふ合成撮影の印畫もこのまきめ方をしたものです。こゝに出した挿繪は、一時間三十キロ(二分間に四町餘の割合)の速度で走つてゐるドイツの流線型自動車を、フォーカル・グリーン・シャッターミ言ふ撮影法によつて、自動車動く瞬間々々に、横の狭い隙間から寫したものを、上へ上へミ繋いで行つて、一つの畫面を組み合せたものです。合成の結果、こんな歪んだ形になるのです。

このやうに大人の世界では、藝術の上でも科學の上でも、組み合わせ方がいろいろ工夫されて居ります。所が子供の世界になるミ、(二)の「繪の大道は一筋道」ミいふ項に出した四つの色鉛筆畫のやうに、も

走る自動車



つゝ面白い、大人から見ても思ひもよらない奇抜なものが作り出されます。これは、子供が文化のカスを背負はされてゐないために、大人のやうに藝術上の型や科學上の理窟に捕はれない組み合わせをするからなのです。第一で題だけを出して、まだ説いてない「天來の圖案」「素の裝飾」が、こゝでは「構圖」にして、特有の味を出してゐるからです。この事は次に精しく申します。

「向きの繪」「補ひの繪」「組み合わせの繪」を言ふ前階段を通り越せば、それから先きの子供の畫面の繪は、わかり易くなります。右に述べたやうに、實は假りに前階段を名づけた繪の方が、却つて面白いわけなんですけれども、カスの文化に中毒してゐる大人にまつては、それが尊ぶすぎて、わからないのです。(七)の「人々自然」といふ項で、自然は人が思ひ餘つて困つた時の道場であるを申しました。この得難い道場が、人間仲間のこんな手近い所にあるのです。しかもそれは、私達の可愛い子供の持つてゐるものなんです。